



島本町文化財調査報告書

第47集

水無瀬離宮跡発掘調査報告

令和5年3月

島本町教育委員会



島本町文化財調査報告書

第47集

令和5年3月

島本町教育委員会



序 文

本報告書は、保育所建設工事に伴い原因者負担で実施した水無瀬離宮跡の発掘調査成果をまとめたものです。

発掘調査を実施した水無瀬神宮の境内地は、後鳥羽上皇の水無瀬離宮の跡地と考えられている重要な場所であるため、確認調査も行ってきましたが、境内地で行う本格的な発掘調査は、当調査が初めてでした。

当調査では、水無瀬離宮跡に関連するような施設の存在は確認できませんでしたが、同時期の溝を確認しました。その溝に投棄された遺物からは、周辺に存在した施設を考える上で、貴重な資料になることと思われます。

このような成果を得られましたのも、工事事業者、土地所有者の方々、そして調査地近隣および関係諸機関の皆様のご理解とご協力をいただいたからこそ成し得たものです。改めてここに深く感謝の意を申し上げますとともに、本町の文化財保護行政に対し、今後とも、変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

令和5年3月

島本町教育委員会

教育長 中村 りか



例　　言

1. 本書は、大阪府教育庁文化財保護課の指導のもと、平成 30 年度に原因者負担で島本町教育委員会が実施した水無瀬離宮跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、島本町教育委員会事務局教育こども部生涯学習課職員木村友紀を担当者とし、調査は平成 30 年 11 月 21 日に着手し、平成 30 年 12 月 28 日に終了し、島本町立歴史文化資料館整理室で引き続き整理調査及び報告書作成業務を実施し、令和 5 年 3 月 31 日に本書の刊行を以って完了した。
3. 調査及び整理作業にあたっては、下記の調査員及び調査補助員の参加を得た。(順不同)
【調査員】坂根 瞳 原 由美子
【調査補助員】布施 英子 竹村 洋香 萩原 朋奈 真子 悠乃 宮田 和茂
4. 本書の執筆は木村・久保（第 2 章第 4 節）が行い、作成・編集は木村・坂根が行った。
5. 本調査に関わる資料の保管と活用及び本調査によって作成された資料などの管理は、島本町教育委員会がこれにあたる。

凡　　例

1. 本書に用いた標高は、東京湾平均海面水 (T.P. [Tokyo Peil]) を基準とした数値である。方位は、国土座標第 IV 系における座標北である。
2. 土層断面図の土色は、小山正忠・竹原秀夫編『新版標準土色帖』第 12 版を使用した。
3. 遺構記号については、以下の通りである。

P : ピット S D : 溝 S K : 土坑



目 次

序文

例言・凡例・目次

挿図目次・付表・図版目次

第1章 はじめに	1
第1節 島本町の地理的概要	1
第2節 島本町の歴史的環境	2
第2章 調査の概要	4
第1節 調査経過	4
第2節 層位	6
第3節 検出遺構	9
1. 第1遺構面	9
2. 第2遺構面	12
3. 下層確認	16
第4節 出土遺物	17
第5節まとめ	20

挿図目次

第1図 島本町内遺跡分布図 (1/20,000)	
第2図 調査地位置図 (1/2,500)	5
第3図 平成20年度調査断面図 (80)	6
第4図 調査区北壁断面図 (1/50)	7
第5図 調査区東壁断面図 (1/50)	8
第6図 第1遺構面平面図 (1/150)	10
第7図 平成20年度調査第2遺構面平面図 (1/80)	11
第8図 第1遺構面断面図 (1/40)	11
第9図 第2遺構面平面図 (1/150)	13
第10図 第2遺構面遺構断面図1 (1/40)	14
第11図 第2遺構面遺構断面図2 (1/40)	15
第12図 下層確認断面図 (1/50)	17
第13図 出土遺物実測図 (1/4)	18



付 表

付表1 報告書抄録 卷末

図版目次

図版一 調査地全景

- 1 調査地全景（西から）
- 2 調査地全景（北東から）

図版二 平成 20 年度確認調査、重機掘削、精査作業、第1 遺構面検出遺構（一）

- 1 平成 20 年度確認調査地点（北から）
- 2 平成 20 年度確認調査北壁（再掘削）
- 3 重機掘削状況（南東から）
- 4 第1 遺構面精査作業（西から）
- 5 東地区・西地区第1 遺構面完掘状況全景（西から）

図版三 第1 遺構面検出遺構（二）

- 1 東地区・西地区第1 遺構面完掘状況全景（東から）
- 2 南地区第1 遺構面完掘状況全景（北から）

図版四 第1 遺構面検出遺構（三）

- 1 南地区南端第1 遺構面完掘状況（南から）
- 2 P 01・02・03 半裁状況（北から）
- 3 P 04 半裁状況（北から）
- 4 P 07 半裁状況（北東から）
- 5 S D 01（東から）

図版五 第1 遺構面検出遺構（四）

- 1 S D 02 遺物出土状況（北から）
- 2 S D 02 遺物出土状況（西から）



図版六 第1遺構面検出遺構（五）

- 1 S D 02 遺物出土状況（北西から）
- 2 S D 02 遺物出土状況西側（北から）

図版七 第1遺構面検出遺構（六）

- 1 S D 02 遺物出土状況東側（北から）
- 2 S D 02（西から）

図版八 第2遺構面検出遺構（一）

- 1 東地区・西地区第2遺構面完掘状況全景（西から）
- 2 東地区・西地区第2遺構面完掘状況全景（東から）

図版九 第2遺構面検出遺構（二）

- 1 南地区第2遺構面完掘状況全景（北から）
- 2 西地区第2遺構面完掘状況（西から）

図版一〇 第2遺構面検出遺構（三）

- 1 東地区第2遺構面完掘状況（西から）
- 2 南地区南端第2遺構面完掘状況（東から）

図版一一 第2遺構面検出遺構（四）

- 1 P 37 半裁状況（北から）
- 2 P 40 半裁状況（北から）
- 3 P 49 遺物出土状況（北から）
- 4 P 50 遺物出土状況（西から）
- 5 P 51 完掘状況（北から）
- 6 P 52 半裁状況（北から）
- 7 P 53 半裁状況（北東から）
- 8 P 55 半裁状況（北から）

図版一二 第2遺構面検出遺構（五）

- 1 P 56 半裁状況（北から）



- 2 P 57・S D 20 半裁状況（南東から）
- 3 P 57 半裁状況（南東から）
- 4 S D 20 アゼ（南東から）
- 5 P 59 完掘状況（北東から）
- 6 P 61 半裁状況（北から）
- 7 P 62 半裁状況（北から）

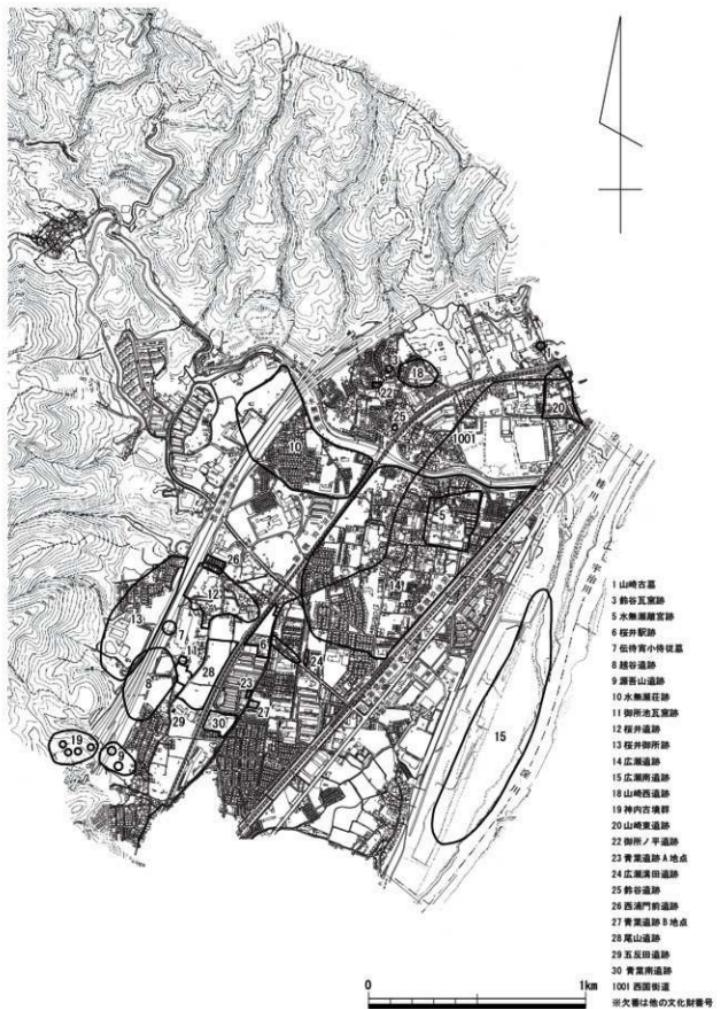
図版一三 第2遺構面検出遺構（六）、下層確認

- 1 P 67 半裁状況（北から）
- 2 S D 21（東から）
- 3 S D 22（北から）
- 4 S K 26 半裁状況（北から）
- 5 S K 27（北から）
- 6 S K 27 アゼ（東から）
- 7 S D 02 西側下層確認
- 8 東地区下層確認（東から）

図版一四 出土遺物（一）

図版一五 出土遺物（二）

図版一六 出土遺物（三）



第1図 島本町内遺跡分布図 (1/20,000)





第1章 はじめに

第1節 島本町の地理的概要

島本町は、大阪府の北東端部、京都府との境に位置し、その東側は北から京都府京都市、長岡京市、大山崎町、八幡市と、西側は大阪府高槻市と、南端は大阪府枚方市と隣接する。町域は、概ね南北約7km、東西約4kmの範囲に南北に細長く広がり、その面積は約16.81km²となる。その地形は、町の北側が山地・丘陵地、その南側は平野部となるが、山地・丘陵地が町域の約7割を占めている。島本町史によると、山地部北側にはポンポン山山地が連なり、その東南側に一段低い天王山山地がある。これらの山地は主に丹波層群によって構成され、砂岩、頁岩、チャート等の岩石からなる。そして、天王山山地の南側には狭い範囲ながら山崎・桜井丘陵とよばれる丘陵地がみられ、主に大阪層群によって構成されている。

また、平野部は、9～13m程度の標高で広がり、主に河川堆積物によって構成され、淀川低地とよばれる。本町南東の山崎狭隘部においては、京都盆地から流れ込む桂川、宇治川、木津川の三川が合流し、淀川となって大阪平野を西流するが、本町には、淀川のほか、山地・丘陵地を源とする水無瀬川、善峰川、滝谷川、鈴谷川、越谷川、八幡川、西谷川等の河川があり、水無瀬川を除いては、山地・丘陵部から短く平野部に流れ出るという小規模なものが多い。淀川低地は、主に淀川からの供給物によって構成されるが、水無瀬川等の他の河川からの堆積物によっても構成され、小河川付近には扇状地地形が広がる。また、水無瀬川沿いには、河岸段丘地形がみられる箇所もある。

現在、本町域では、平野部から丘陵部にかけて宅地や工業用地として開発が進んでいるが、いまだ山地部には開発が及ばない範囲が広く、森林樹が良好に保たれており、「大沢のすぎ」、「尺代のやまもも」、「若山神社のツブライジ林」が大阪府により天然記念物として指定されている。

島本町は、古代の国都制においては攝津国島上郡に属するが、東は山城国に接し、その地勢から交通の要衝となっていた。南に流れる淀川は水運の重要な交通路であり、特に長岡京・平安京遷都以降はその重要性を増していく。平安時代、山崎には津が整備され、またさかのぼる奈良時代には架橋もされ⁽¹⁾、淀川を介した島本町付近の地域的重要性がわかる。また、水運ばかりでなく、淀川と丘陵部との間に挟まれた平野部上においては、京と西国とを結ぶ山陽道（西国街道）が通り、陸路においても重要な幹線路が貫いていた。現在も町域には、JR東海道線、東海道新幹線、阪急電鉄京都線、国道171号線等、重要な交通幹線が通っており、大阪と京を結ぶ中間地点としても、古来より島本町の地勢的位置づけは重要性の高いものであった。



第2節 島本町の歴史的環境

島本町における人々の活動の痕跡をたどると、最も古くは旧石器時代にまでさかのぼる。段丘上に位置する山崎西遺跡では、国府型ナイフ形石器やサヌカイト剥片を数点採集しており、後期旧石器時代におけるキャンプサイトなどの存在を想定することができる。

縄文時代になると、段丘上に位置する越谷遺跡において縄文時代中期の土器片が多数出土している。また、平野部に広がる広瀬遺跡では縄文時代晚期の竪穴式建物跡を確認しており、集落が展開していた可能性が考えられる。

次に弥生時代では、桜井駅跡で弥生時代前期の遺物の出土しているが、弥生時代中期になると、青葉遺跡A地点・B地点において竪穴建物跡や溝を検出しており、桜井駅跡・広瀬溝田遺跡では耕作溝を確認している。これらは、いずれも平野部に位置する遺跡であり、この付近一帯においては、弥生時代中期に集落や耕作地が広がっていたものと考えられる。また、弥生時代後期になると、段丘上に位置する越谷遺跡や伝待宵小侍從墓において当該期の遺物の出土を確認している。

古墳時代においては、これまでのところ集落に関わる明確な遺構を検出していないが、広瀬遺跡や越谷遺跡などで古墳時代後期の遺物が出土している。越谷遺跡では、名神高速道路建設工事に伴い出土した遺物の中に、古墳の副葬品と考えられる須恵器杯・壺、刀等の遺物が存在した。また、源吾山遺跡と神内古墳群は平野部を南に望む丘陵上に位置し、一続きの古墳群であろうと推定されている。源吾山遺跡は、横穴式石室の一部と考えられる石材の散布と、名神高速道路建設工事に伴い出土した副葬品と考えられる須恵器から古墳の存在が想定でき、島本町と高槻市とをまたいで広がる神内古墳群においては、高槻市側で横穴式石室が確認されており、ほかに墳丘のような形状の地形が存在している。

飛鳥～奈良時代になると、丘陵部で鈴谷瓦窯が操業した。これまでに2基の瓦窯跡が中学校教諭による発掘調査において確認されており、出土瓦の特徴から7世紀末から8世紀初頭にかけてのものと考えられている。また、鈴谷瓦窯跡の南西側にある御所ノ平遺跡では竪穴式建物跡を確認しており、建物跡内から鈴谷瓦窯跡と同様の瓦や粘土塊が出土していることから、瓦製作の工房跡の可能性がある。この他、奈良時代中期には、水無瀬川右岸において東大寺領水無瀬荘が存在していたことが、正倉院に伝わる「摺津職嶋上郡水無瀬荘図」によって知ることができ、その付近一帯が水無瀬荘として埋蔵文化財包蔵地となっている。

ところで、前節で島本町は水運・陸路とも交通の要衝であったと述べたが、続日本紀和銅四年正月丁未条には、平城京と西国とを結ぶ幹線道路上に駅伝制の駅が置かれたとあり、島本には大原駅が設置されたということが定説となっていた。大原駅は平安時代前期のうちに廃止になったようであるが、長岡京・平安京遷都を経て平安時代になると、京と西国とを結ぶ交通



の要衝としての島本の地の重要性は増していった。広瀬遺跡においては、西国街道沿いでの発掘調査で小石敷きの路面をもつ中世の道路状遺構を検出している。そこには平安時代の遺物も含まれ、その整備が古代にまで遡る可能性がある。また、淀川河川敷にある広瀬南遺跡では、河道中より須恵器の大甕が見つかっており、これは淀川の水運により運ばれてきたもの可能性がある。

さて、このような地勢にある島本町においては、平安時代から鎌倉時代にかけて、天皇や貴族が度々遊行に水無瀬の地へ訪れるようになった。桓武天皇や嵯峨天皇は遊獵に訪れ、文徳天皇の子である惟喬親王はこの地に御殿を築いている。広瀬遺跡においては平安時代前期の建物群が検出しているが、これは惟喬親王の水無瀬離宮関連施設の可能性がある。また、鎌倉時代には、後鳥羽上皇が正治元（1199）年に水無瀬離宮の造営を行った。この水無瀬離宮は建保4（1216）年の洪水で倒壊したが、翌年には丘陵上に再建されている。広瀬遺跡では、後鳥羽上皇の水無瀬離宮に関連するものと考えられる建物跡や所用瓦を検出しており、また、丘陵上にある西浦門前遺跡では、庭園施設と考えられる遺構を検出している。

その後、建新政から室町時代へと時代が動くとき、楠木正成・正行父子が別れた場所として太平記に記述のある桜井宿が、現在桜井駅跡として国史跡に指定されている。父子別れの場面は太平記という軍記物語の一場面であり、事実であるかどうかは不明であるが、発掘調査でこれに関する資料は得られていない。また、桜井駅の前身として、近辺に大原駅があったと考えられているが、これまでのところ、これら駅に関連する資料についても確認していない。ただし、桜井駅跡における発掘調査では、前述の弥生時代の遺構・遺物のほか、鎌倉時代、室町時代、江戸時代の遺構・遺物を検出しており、特に、室町時代から江戸時代にかけての井戸を複数まとめて確認している。

近世になると、発掘調査で得られた資料では、山崎東遺跡において地下貯蔵庫の痕跡と考えられる石組み遺構を検出している。

【註】

（1）津及び架橋地点は、大山崎町内に比定されている。

【参考文献】

- 島本町史編さん委員会『島本町史』本文篇 島本町役場 昭和50年
島本町教育委員会『島本町文化財調査報告書』第1集～第35集 島本町教育委員会 平成3年～平成31年
名神高速道路内遺跡調査会『水無瀬跡遺跡発掘調査報告書』名神高速道路内遺跡調査会 平成8年
名神高速道路内遺跡調査会『越谷遺跡他発掘調査報告書』名神高速道路内遺跡調査会 平成9年



第2章 調査の概要

第1節 調査経過（第2図）

調査地は、平安時代及び中世のその他の遺跡（宮跡）である埋蔵文化財包蔵地「水無瀬離宮跡」の範囲内であり、保育所建設工事が計画されていたため、文化財保護法第93条第1項の規定により、「埋蔵文化財発掘の届出」が提出され、大阪府教育委員会教育長の指示に基づき、発掘調査を実施したものである。

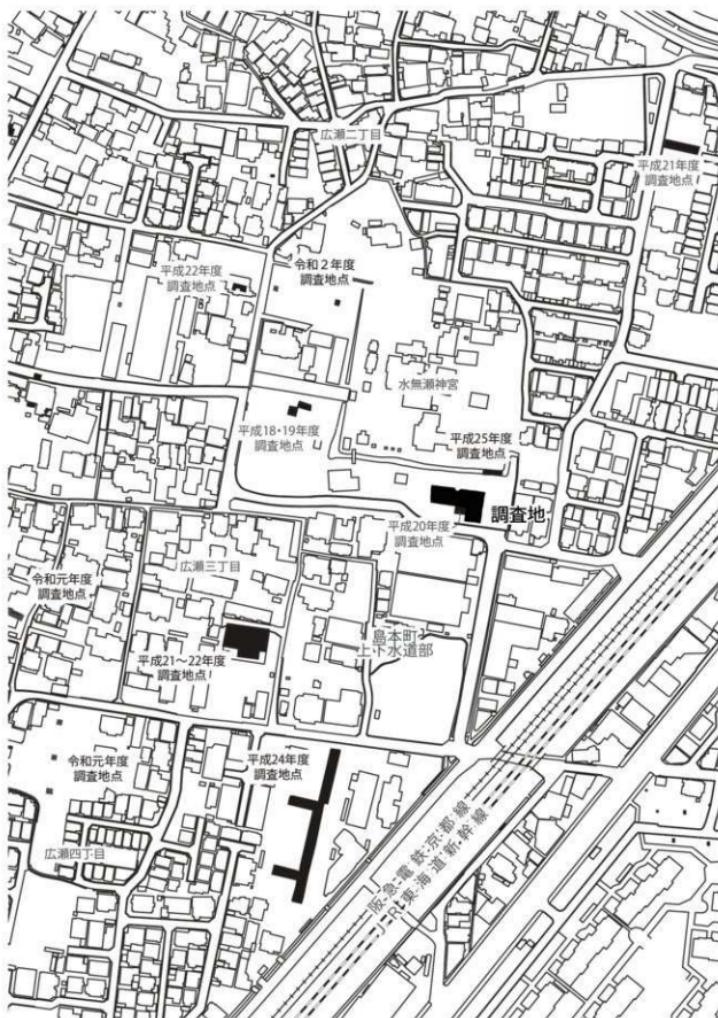
当調査地は水無瀬神宮の境内であり、調査地の北側には、重要文化財の水無瀬神宮客殿及び茶室などの社殿が建ち並んでいる。この水無瀬神宮は、後鳥羽上皇が造営した水無瀬離宮の跡地に、水無瀬信成・親成が上皇の菩提を弔うために建てた御影堂が前身となっていると伝えられており、現在の水無瀬神宮の境内付近が、水無瀬離宮の中心施設が存在した場所と考えられている。

水無瀬離宮から御影堂、水無瀬宮、水無瀬神宮へと変遷しながらも存続し、寺院及び神社として営まれ続けているため、社殿付近の埋蔵文化財の調査例はないが、周辺地においては調査例が数件ある。

平成18・19年度に実施した水無瀬神宮境内西側に存在した公園部分（現駐車場）において実施した確認調査⁽¹⁾では、中世後半から近世にかけての遺構面と石組井戸などの遺構を検出した。

平成20年度には、今回の建物建設予定範囲に一部かかる場所にて確認調査を実施しており（図版二-1）、近世期の遺構面を1面（第1遺構面）、中世期の遺構面を2面（第2遺構面、第3遺構面）検出している⁽²⁾。第2遺構面で検出した遺構からは、鎌倉時代前半頃の遺物が出土しており、遺構の年代もこの時期に属するものと考えられる。第3遺構面からは、瓦溜まりなどの遺構を検出しており、当時、出土した小型の瓦は祠等の施設で使用されたものではないかと考えられたが、その後、平成21年度に実施した広瀬遺跡の発掘調査において、水無瀬離宮関連施設と考えられる建物跡を検出し、その周辺から同様の瓦が出土したことから、蓋葺きの熨斗部分などに使われたものであることが判明した⁽³⁾。この瓦も、鎌倉時代前半頃のものであり、第2遺構面・第3遺構面ともに近しい年代を与えることができる。今回の建設予定建物の基礎の深さは、地表面から約1.2mまであり、第2遺構面から第3遺構面の間で留まるものであるため、今回の発掘調査では、平成20年度調査時の第2遺構面を対象として調査を実施することとした。発掘調査を実施するに当たり、まず今回の建物建設範囲内の平成20年度調査の北端付近を掘り返し、平成20年度調査の北壁を観察しながら、掘削を進めた（図版二-2）。

当調査地の北側は、水無瀬神宮の堀に面しているが、当調査地から約10m北の堀の南東



第2図 調査位置図 (1/2,500)



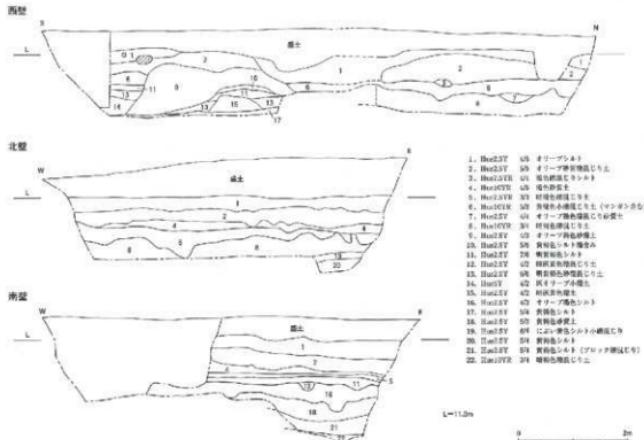
隅付近の確認調査を平成 25 年度に実施した⁽⁴⁾。しかしながら、堀内に遺物が全く含まれず、堆積層の年代を把握することができなかった。また、堀の上面より、深さ約 3.4 mまで掘削を行ったが、底を確認することができなかった。

建設予定建物は、東西長約 30 m、南北幅約 10 mの建物であるが、東端にて約 8 m南に曲がり、L字状を呈するため、調査区も同様に設定した。調査区西端から 15 m東の地点までを西区、15 m東の地点から東端までを東地区、南に突き出た部分を南地区と呼称して、調査を行った（第 6・8 図）。

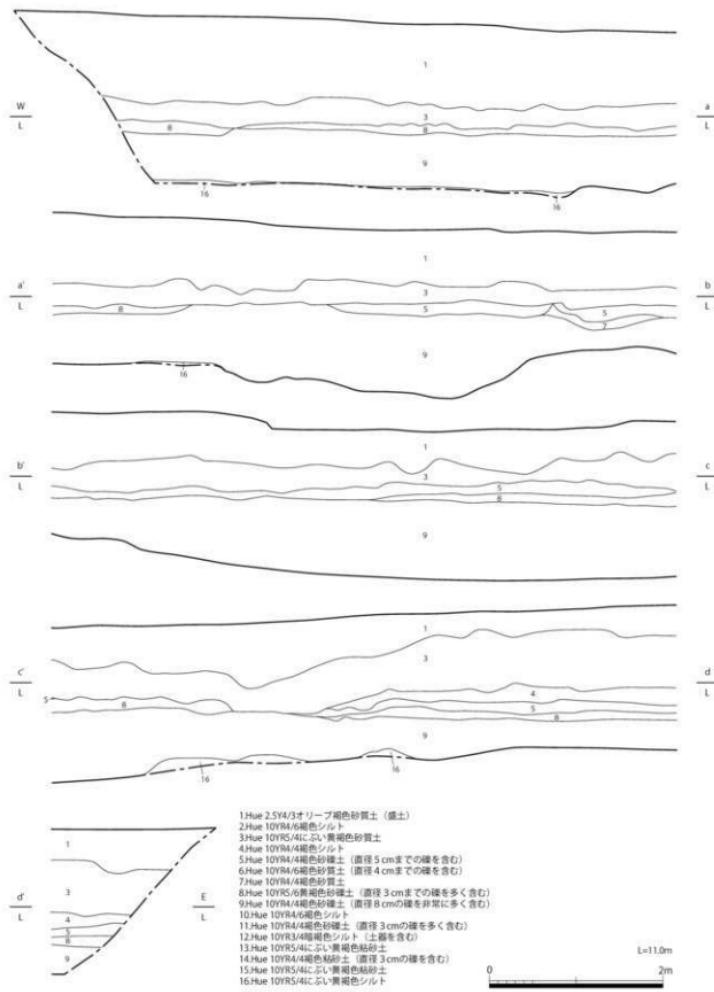
その結果、平成 20 年度調査時と同様に、中世期の遺構面を 2 面検出し、特に第 1 遺構面においては、鎌倉時代前半の遺物が投棄された溝（SD 02）の存在を確認した。

第2節 層位（第3～5図）

平成 20 年度調査では、第 2 図第 6 層直上を第 2 遺構面として取り扱っているが、北壁付近を再度掘削し、壁面精査を行ったところ、第 6 層の下の第 19 層、もしくは第 20 層に該当すると考えられる層の直上にも遺物が存在することを確認したため、今回の発掘調査では、第 6 層直上を第 1 遺構面、第 19 層、もしくは第 20 層の直上を第 2 遺構面として取り扱うこととした。



第3図 平成 20 年度調査断面図（1/80）



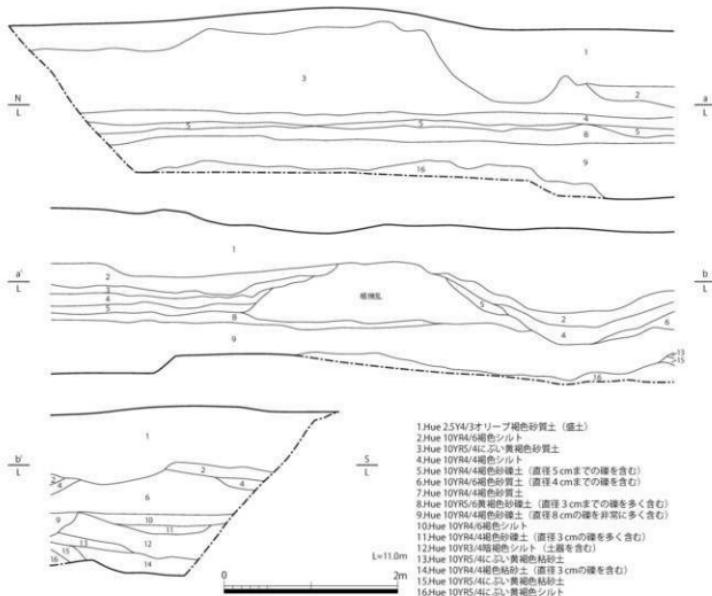
第4図 調査区北壁断面図 (1/50)



調査地は、水無瀬神宮の駐車場として利用されており、地表面から30～100cmの厚さで第4・5図第1層のオリーブ褐色砂質土の盛土、その下に30～100cmの厚さで第3層のにぶい黄褐色砂質土の盛土が堆積していた。

調査区東側では、これらの盛土の下に第4層の褐色シルトが堆積し、それより下層は第5層の直径5cmまでの礫を多く含む褐色砂礫土、第8層の直径3cmまでの礫を多く含む黄褐色砂礫土と砂礫土層が続き、流路等の影響を強く受けたことがうかがえる。第8層直下が第1遺構面となるが、後述するSDO2が流れる調査区北端付近から調査区東側は、60~100cmの厚さで第9層の直径8cmまでの礫を非常に多く含む褐色砂礫土が堆積しており、第3図第6層と対応する第4・5図第10層の褐色シルトは確認できなかった。

第10層は、西地区の南側、東地区の南西側、南地区の南端付近に残存しており、第1遺構面として第10層直上面に遺構・遺物の存在を確認することができた。この第10層を除去した第12層の暗褐色シルトを基盤とする面が第2遺構面であり、この面において多くのピット



第5図 調査区東壁断面図 (1/50)



や溝、土坑といった遺構の存在を確認した。

第12層より下層では、第16層のにぶい黄褐色シルトが比較的安定しており、調査区全域に広がる。第2遺構面調査終了後、南地区南端を断ち割り、下層確認を行ったところ、この第16層は南側に向かって下がっていくことが分かった。平成20年度調査の第3遺構面が地表面から深さ約2.3mで確認しているのに対し、第16層の直上が調査区南端では、地表面から深さ約2.0mであるため、この第16層直上が平成20年度調査の第3遺構面と対応する可能性がある。第16層は、東地区東側及び南トレンチ北側において露出していたが、その直上面に明確な遺構の存在は確認できなかった。

第3節 検出遺構

1. 第1遺構面（第6図）

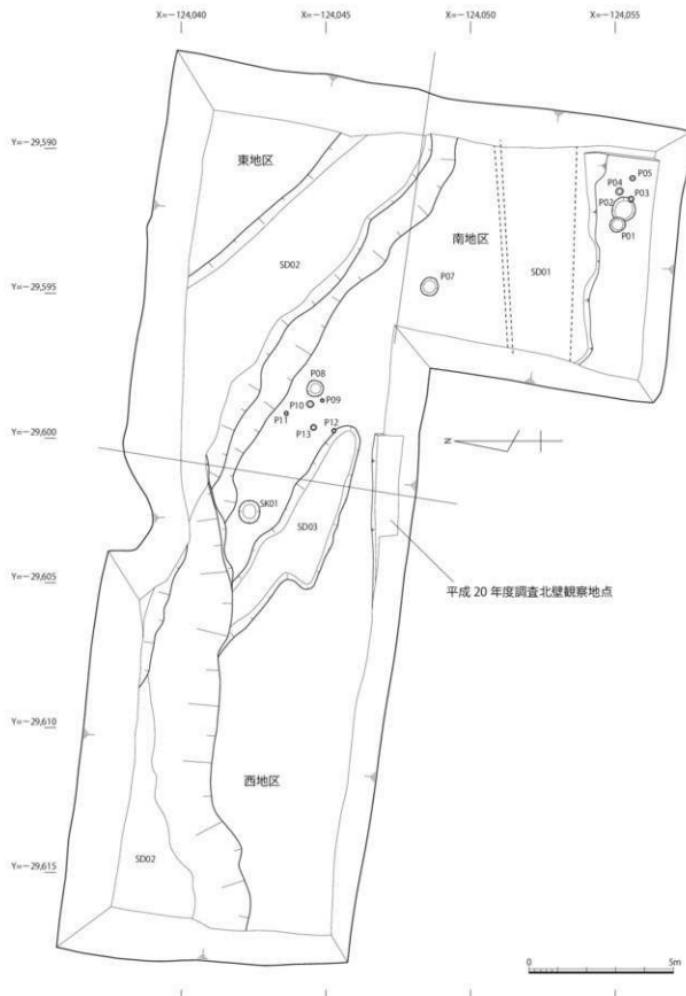
ピット13基、溝3条、土坑1基を検出したが、第2遺構面と比べると遺構が稀薄である。ピットも建物跡のように並ぶものではなく、その性格は不明である。SD02からは多くの遺物が出土し、当調査で出土した遺物量の大半を占める。遺構に伴わない遺物としては、土師器皿、須恵器、瓦器椀、瓦器羽釜等が出土した。

P01・02・03（図版四-2） 南地区南端において検出したピットであり、3つのピットが東西方向に隣接して並ぶ状態で検出した。西からP01・02・03と並び、P01は直径約50cm、深さ約10cmを測り、埋土は直径2cmまでの礫を多く含む。P02は直径約45cm、深さ約5cmを測る。P03は直径約25cm、深さ約5cmを測る。P01・02の埋土内に土師器片を含む。

P04（図版四-3） 南地区南端において検出した直径約20cm、深さ約5cmのピットであり、埋土内に土師器片と炭を含む。

P07（図版四-4） 南地区北側において検出した直径約60cm、深さ約10cmのピットであり、埋土は直径3cmまでの礫を多く含む。埋土内からは、土師器皿などが出土しており、その中に白色系のものも含んでいる。

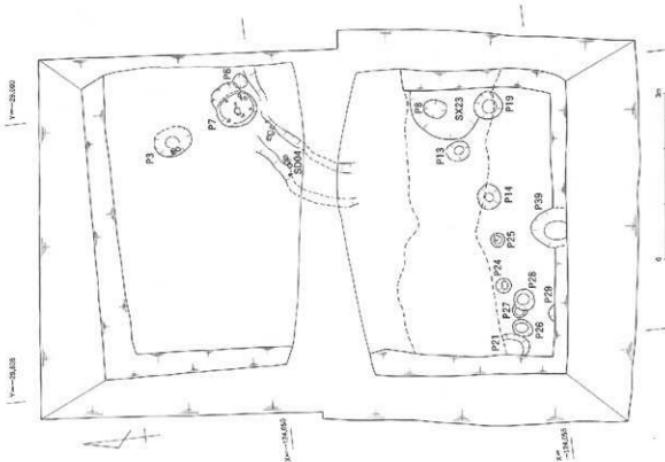
SD01（図版四-5） 南地区において検出した東西方向に流れる幅約3m溝である。長さは東西ともに調査区の外に続いており、調査区の幅である約7.5m以上としかわからないが、平成20年度調査時にも同様の位置に東西方向に続く落ち込みを確認している（第7図点線部分）。この落ち込みが、当調査のSD01と一緒にものであれば、西側に約6m延びることは確実となる。SD01内及び周辺は第9層の砂礫層により埋まっており、遺構としての検出することはできなかったが、南地区的東壁及び西壁の観察により溝跡であることが分かった。断面観察により判明した南側の遺構の上端は、南地区南端の平坦面の北端付近である。それ以外の上端と下端は第6図に点線で復元した。



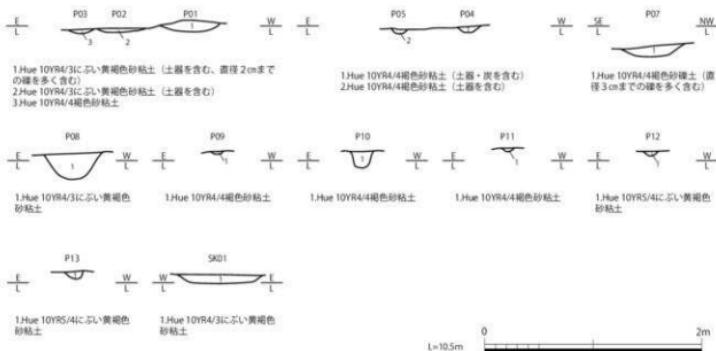
第6図 第1遺構面平面図 (1/150)



SD 02 (図版五・六・七) 西地区から東地区にかけて延びる溝である。西地区では北端で見つかっており、北岸は調査区外であるため、正確な幅は不明である。西地区においては、東西方向に延びているが、西地区と東地区の境界付近から、南東に方向を変え、一部南地区的北東



第7図 平成20年度調査第2遺構面平面図 (1/80)



第8図 第1遺構面遺構断面図 (1/40)



隅かかる。東地区では北岸の可能性がある段を検出しておき、南岸と北側の段との幅は、広いところでは5mを超える。南岸と底の高低差が約60cmであるのに対し、北側の段と底の高低差は約20cmと低く、さらに北側に位置する調査区の壁面にもSD02の埋土である第9層が存在することから、東地区においてもSD02の北岸は調査区外に位置する可能性が高いものと考える。そうであるならば、SD02の幅は8mを超える大きな溝となる。

この溝からは、土師器皿・羽釜、瓦器椀・鍋・羽釜、須恵器甕、丸瓦、平瓦などが出土しているが、特に西地区の南岸から皿や鍋、羽釜がまとまって出土した。当調査で出土した遺物量は、コンテナ7箱分であるが、そのほとんどがこの場所から出土したものである。遺物の年代は、鎌倉時代前半頃であり、水無瀬離宮が営まれた時代と一致する。この時期に溝として整備されたものと考えられるが、この溝の埋土が底から岸上まで第9層の単一層であり、洪水や土石流といったものにより、短期間で埋没したことがうかがえる。埋土の砂礫土内に入る礫も直径8cmまでと比較的大きな礫があり、砂の量も少なく、ほとんどが礫によって構成されていることも、洪水などにより埋没したことを示している。

2. 第2遺構面

ピット54基、溝4条、土坑11基を検出した。全体的に第1遺構面と比べて遺構が密であるが、西地区に土坑、東地区にピット、南地区南端付近の平坦面に溝跡が集中する。ピットは、建物跡のように並ぶものではなく、その性格は不明である。当調査で出土した遺物のほとんどは日常雑器であるが、SD22からは白磁の小片が1点出土した。遺構に伴わない遺物としては、土師器皿、瓦器、丸瓦等が出土した。

P37(図版一一一1) 東地区西側において検出した直径約30cm、深さ約10cmのピットであり、埋土は直径2cmまでの多くの礫と土師器片を含む。

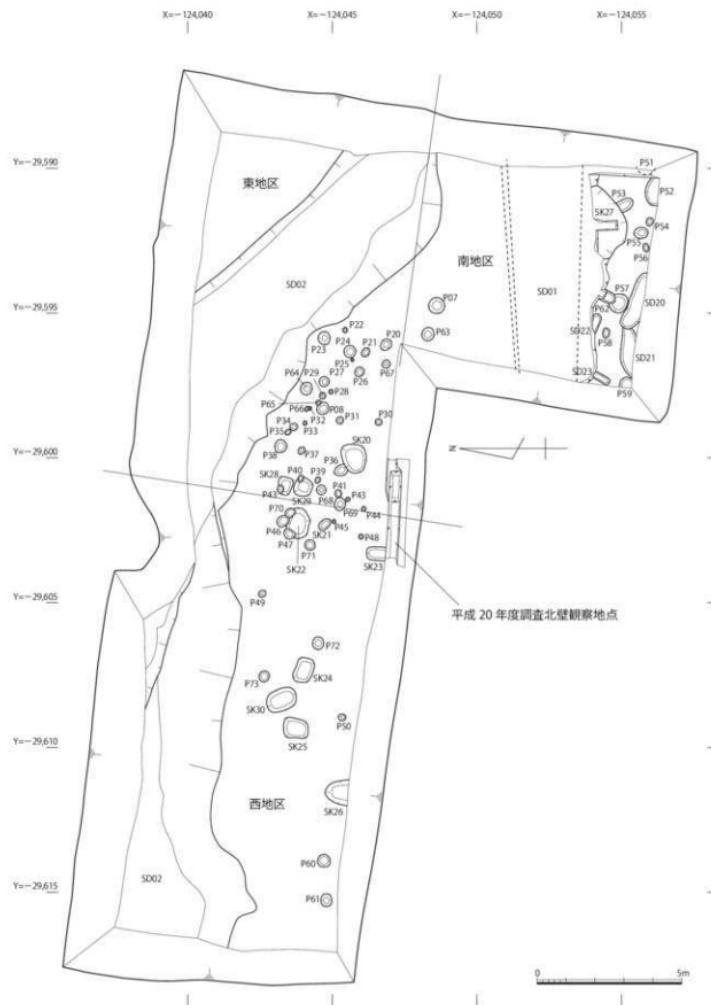
P40(図版一一一2) 東地区西端付近において検出した直径約25cm、深さ約10cmのピットであり、埋土は直径8cmまでの多くの礫と土師器片を含む。

P49(図版一一一3) 西地区東側において検出した直径約20cm、深さ約25cmのピットである。埋土内からは、土師器皿と瓦器椀が出土した。

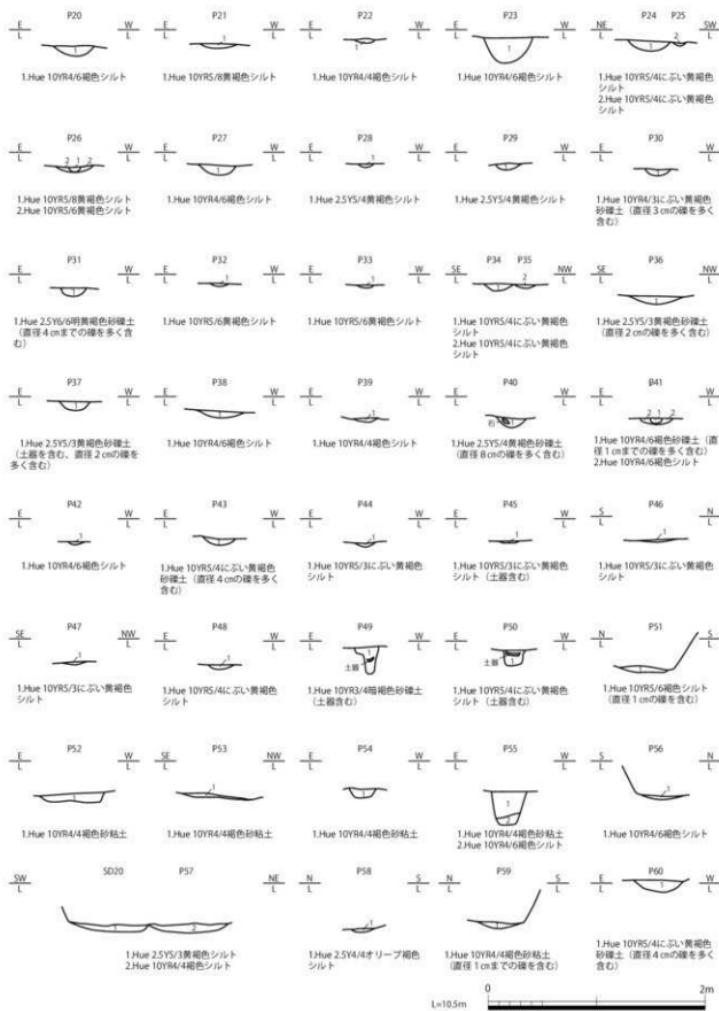
P50(図版一一一4) 西地区中央南側において検出した直径約20cm、深さ約15cmのピットである。小径のピットでありながら、埋土内には多くの遺物を含み、土師器皿、須恵器甕(第30図14)瓦器椀が出土した。

P51(図版一一一5) 南地区南東隅付近において検出した直径約50cm、深さ約5cmのピットであり、埋土は直径1cmまでの礫を含む。埋土内からは、土師器片が出土した。

P52(図版一一一6) 南地区南東隅付近において検出した直径約60cm、深さ約5cmのピットである。埋土内からは、土師器片が出土した。



第9図 第2遺構面平面図(1/150)



第10図 第2遺構面遺構断面図1 (1/40)



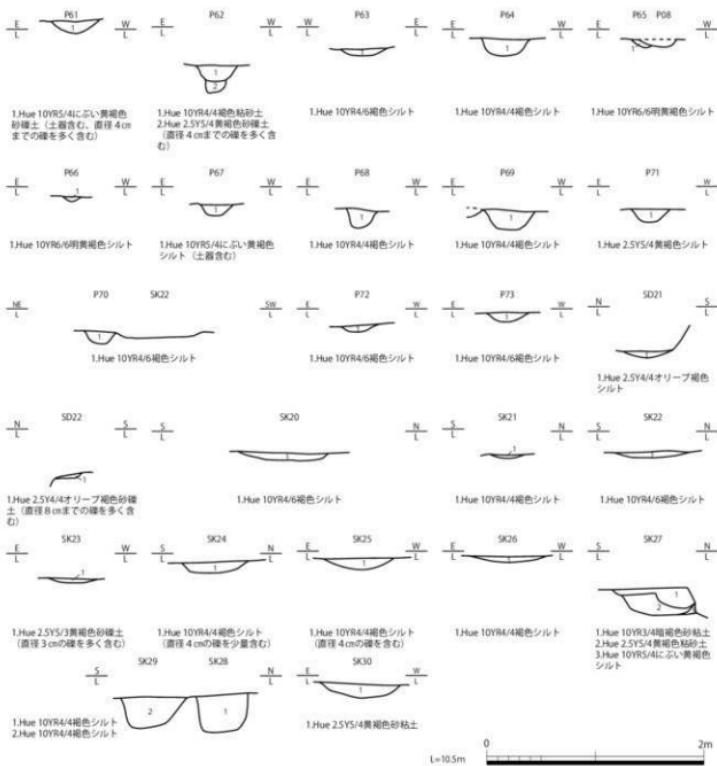
P 53(図版一一一7) 南地区南側において検出した直径約60cm、深さ約4cmのピットである。

埋土内からは、土師器片が出土した。

P 55(図版一一一8) 南地区南側において検出した直径約30cm、深さ約30cmのピットである。埋土内からは、土師器片が出土した。

P 56(図版一二一1) 南地区南側において検出した直径約40cm、深さ約4cmのピットである。埋土内からは、土師器片が出土した。

P 57(図版一二一2・3) 南地区南側において検出した直径約80cm、深さ約10cmのピット



第11図 第2遺構面遺構断面図2 (1/40)



トである。埋土内からは、土師器片が出土した。

P 59（図版一二一5） 南地区南西隅において検出した直径約40cm、深さ約5cmのピットであり、埋土は直径1cmまでの礫を含む。埋土内からは、土師器片が出土した。

P 61（図版一二一6） 西地区西側において検出した直径約40cm、深さ約10cmのピットであり、埋土は直径4cmまでの礫を多く含む。埋土内からは、土師器皿が出土した。

P 62（図版一二一7） 南地区南側において検出した直径約40cm、深さ約25cmのピットであり、埋土は直径4cmまでの礫を多く含む。埋土内からは、土師器片が出土しており、その中には白色系のものも含んでいる。

P 67（図版一三一1） 東地区中央南側において検出した直径約30cm、深さ約10cmのピットである。埋土内からは、瓦器椀と土師器片が出土した。

S D 20（図版一二一2・4） 南地区南側において検出した幅約70cm、長さ約200cm、深さ約5cmの溝である。埋土内からは、土師器片が出土した。

S D 21（図版一三一2） 南地区南側において検出した幅約50cm、長さ200cm以上、深さ約6cmの溝であるが、南側は調査区外に延びており、その長さは不明である。埋土内からは、須恵器鉢と土師器片が出土した。

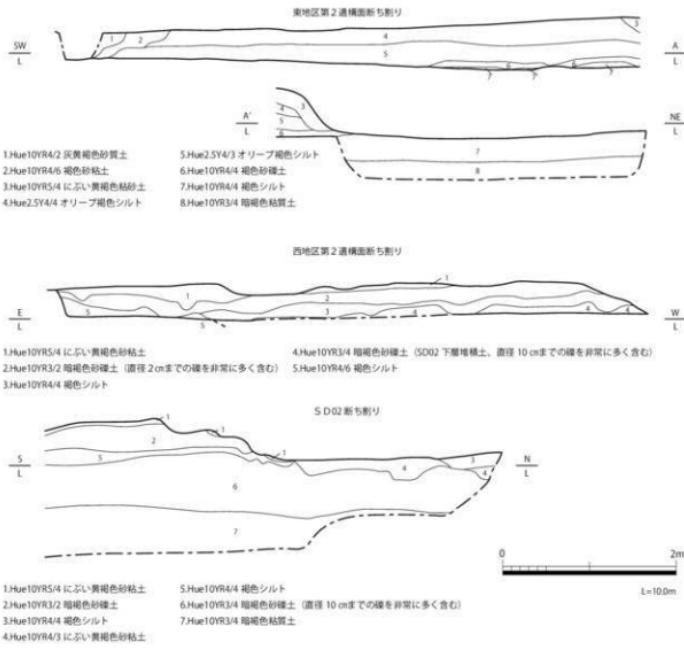
S D 22（図版一三一3） 南地区南側において検出した幅約25cm、長さ50cm以上、深さ約4cmの溝であるが、北側はS D 01によって搅乱されており、その長さは不明である。埋土内からは、白磁が出土した。

S K 26（図版一三一4） 西地区西側において検出した東西幅約70cm、南北幅70cm以上、深さ約5cmの土坑であるが、南半分が調査区外に延びている。埋土内からは、土師器片が出土した。

S K 27（図版一三一5・6） 南地区南側において検出した東西幅約250cm、南北幅120cm以上、深さ約25cmの土坑であるが、北側はS D 01によって搅乱されている。埋土内からは、瓦器が出土した。

3. 下層確認

第2遺構面の調査終了後、東地区及び西地区の第2遺構面とS D 02を断ち割り、下層の堆積状況の確認を行った。その結果、他の土層が、水平方向に堆積しているのに対して、東地区第2遺構断ち割り断面図第3層及びS D 02断ち割り断面図第1層は、S D 02の岸を形成する斜面に沿うように堆積していることを確認した。東地区第2遺構断ち割り断面図第4～8層が堆積した後に、第4～6層が削られて溝が形成されたものと考えられるが、第3層は溝の南岸となる斜面だけに堆積しており、溝の底には堆積していないことから、自然に堆積したものではなく、溝を護岸するために貼られたものと推測できる。そのため、S D 02は、自然流路ではなく、南岸に遺物が投棄される鎌倉時代前半以前に整備された溝と考えられる。

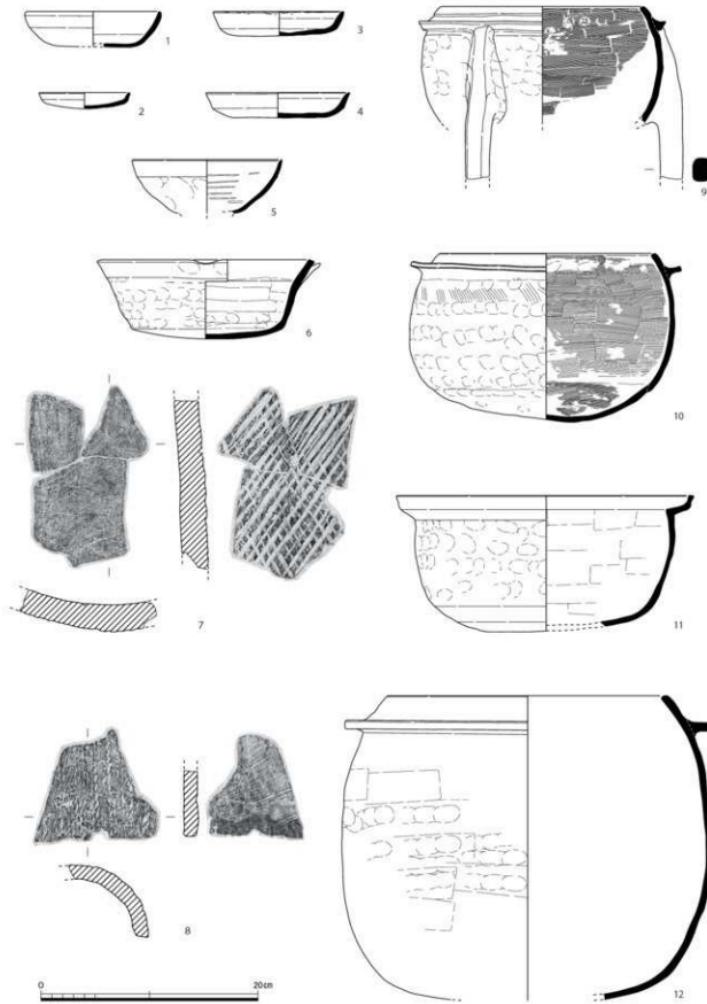


第12図 下層確認断面図(1/50)

西地区西側においてSD02を断ち割ると、溝の南岸を構成する層（第2層）や溝よりも下層にも流路上の砂礫土（第6層）が堆積していることを確認した。この地は何度も洪水の被害に遭ったことが分かるが、東地区において下層確認を行ったところ、流路上の砂礫土は確認できなかった（図版一三一八）。下層の堆積状況が、どの地点から変化するのかは不明であるが、西地区において南北方向に広く砂礫層が堆積していることから考えると、調査地西地区的下層に存在する流路は、南北方向に流れたものである可能性がある。

第4節 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、コンテナ7箱であった。出土遺物のほとんどが土器類で、土器・須恵器・瓦器類があり、僅かであるが縄文土器を含んでいる。他に瓦類が少数出土している。



第13図 出土遺物実測図1 (1/4)

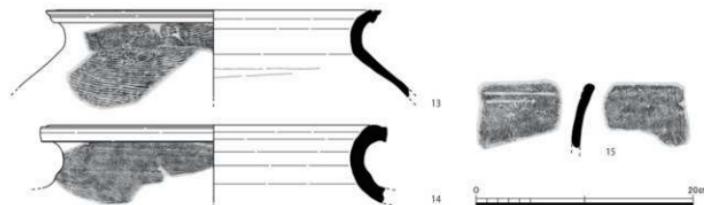


出土遺物の年代は、13世紀前半から14世紀代頃までを中心としており、平成20年度調査の時に出土した土器とほぼ同じ様相を呈している。また、今回の調査で出土した土器の大半は調査区の北側で検出した溝S D 02からのものである。それぞれの詳細は以下に記述する。

1~4は、土師器である。1は、口径12.6cm、器高3.3cmの杯Aで、口縁部はヨコナデで調整し、端部は内湾する。薄手の白色系土器である。白色系土器については、実測に至らないまでも、検出された柱穴からも出土しており、遺跡の性格を示す一つとして注目できる。時期は、13世紀中葉頃と考える。2は、口径8.4cmの皿小で、口縁部はヨコナデ、外面はユビオサエを施す。3は、口径12.1cmを測り、口縁端部にはススの付着が見える。4の口径は、13.3cmである。3・4は、厚手の皿大で、口縁部はやや外反する。13世紀中葉~後半頃のものと考える。5は、瓦器椀で口縁端部に沈線を呈する。内面のヘラミガキは粗い。6は、瓦器の片口の鍋である。口径は20.0cmを測り、口縁端部に面を持ち、やや外反する。外面はユビオサエを施しており、粘土紐痕が見える。内面はナデを施す。土師器皿の時期よりは、やや新相を呈する。

7は平瓦、8は丸瓦である。7は、平瓦凸面に格子タタキ痕が残り、凹面には密な布目痕を残す。全長は不明であるが、厚さ2.2cmと大ぶりなものである。8は、丸瓦凸面に繩タタキ痕を残し、凹面にはコピキAが残る。水無瀬離宮関連施設周辺で出土する小ぶりな丸瓦であり⁽⁵⁾、12世紀末~13世紀前半頃のものである。7と同様のタタキのものは、水無瀬離宮関連施設周辺では出土していないものの、水無瀬離宮関連施設周辺でも、少数ながら大ぶりな平瓦も出土していることから、7も8と同様の年代と考えておく。

9~12は、煮炊具で、9は、瓦器の足付羽釜ある。口径は、18.8cmを測り、短く厚い鈇部が口縁端部近くに付く。外面体部はユビオサエを施し、内面は上部に鈇貼り付け時のユビオサエを僅かに残すが、丁寧なヨコハケが施されている。10も、瓦器の羽釜であり、口径は20.0cmを測る。外面はユビオサエを施し、下部に粘土紐痕が見える。内面は、ヨコハケを施した後、ナデを行っている。外面の一部にススの付着が見られる。9・10の年代は、13世紀前半頃とみておく。11は、瓦器の鍋であり、口径は27.4cmを測る。外面はユビオサエ、内面は横方向



第14図 出土遺物実測図2 (1/4)



のナデを行っている。外面にはスヌの付着が見られる。13世紀前半頃と考える。12は、土師器の羽釜であり、口径は26.0cmを測る。外面にユビオサエ、内面にヨコナデを施している。13世紀前半頃～中葉頃と考える。13・14は、須恵器の甕であり、13は口径30.9cmを測る。口縁は、角縁で短くおさめる。外面は、体部から口縁部までナナメ方向のタタキを施す。頸部の屈曲部分の上部は、ヨコナデにより消失している。13世紀中葉頃とみておく。14は、口径32.0cmを測り、口縁端部がやや垂下し、肩部の外面に平行タタキが僅かに見える。13よりは、新相と考える。いずれも東播磨産のものであり、当時の土器流通を考える上で貴重な資料と言える。15は、縄文土器の深鉢で、内面に2条の沈線がみえる。

第5節　まとめ

当調査においては、ピット・溝・土坑といった遺構を確認し、コンテナ7箱分の遺物が出土した。

出土した遺物のほとんどは、調査区北側で検出したSD02の南岸に投棄されたものである。SD02から出土した遺物の年代は、13世紀前半を中心とし、13世紀後半までのものを含んでいる。これは、この溝が水無瀬離宮の造営以前に整備され、13世紀後半以降に埋まつたものであることを示している。また、この溝の埋土には粘質土が含まれず、砂層と疊層の分離も行われておらず、底から溝跡検出面まで均質な砂疊層により埋土が構成されている。このことから、この溝が洪水などにより、大量の運ばれてきた土砂により一気に埋没したものと考えられる。溝の存続期間が、水無瀬離宮が営まれた時期と近いが、「百鍊抄」の建保4年(1216)の記事に、大風洪水の時に水無瀬離宮の殿舎が転倒流出したと記載されているように、当調査地周辺は洪水の影響を受けやすい地であったことがうかがえる。

水無瀬離宮の中心施設が存在したと推定されているのは、水無瀬神宮の社殿が存在する当調査地より北側であるが、溝の北岸ではなく、南岸から多くの遺物が出土しており、溝を挟んだ南側にも何かしらの施設が存在した可能性がある。投棄された遺物は、煮炊具が多く、調理に関する施設の可能性があるが、今回の調査においては、建物跡となるような遺構の存在は確認できなかった。平成20年度調査の際には、当調査地の南端に近い場所で瓦溜まりを検出しており、その瓦溜まり内から水無瀬離宮関連施設周辺で出土する瓦と同様のものが出土していることから、当調査地より南側に何らかの施設が存在した可能性がある。

当調査では、具体的な施設の存在は確認できなかったが、溝跡の整備時期や埋没時期、周辺の遺物の出土状況から、水無瀬離宮について多くのことを検討できる資料になりえるものと考える。今後も調査を進め、検討を重ねていきたい。



【註】

- (1) 中津 梢 『島本町文化財調査報告書』第11集 島本町教育委員会 平成20年
- (2) 久保 直子 『島本町文化財調査報告書』第12集 島本町教育委員会 平成21年
- (3) 久保 直子 『島本町文化財調査報告書』第19集 島本町教育委員会 平成24年
- (4) 木村 友紀 『島本町文化財調査報告書』第25集 島本町教育委員会 平成25年
- (5) 木村 友紀 『島本町文化財調査報告書』第41集 島本町教育委員会 令和4年



ふりがな	しまもとちょうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	鳥本町文化財調査報告書 報告書抄録
副書名	広瀬遺跡範囲確認調査概要報告
巻次	
シリーズ名	鳥本町文化財調査報告書
シリーズ番号	第47集
編著者名	木村 友紀、久保 直子、坂根 瞬
編集機関	鳥本町教育委員会事務局 教育こども部 生涯学習課
所在地	〒618-8570 大阪府三島郡鳥本町桜井二丁目1番1号 Tel.075-961-5151
発行年月日	令和5年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号			(m ²)		
みなせりきゅうあと 水無瀬難宮跡 (MR 18-1 門ノ内)	しまもとちょうひろせ 鳥本町広瀬三丁目 1501番1	27301	5	34° 88' 56"	135° 67' 21"	2018.11.21 ~ 2018.12.28	424.2	保育所建設工事 に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
みなせりきゅうあと 水無瀬難宮跡 (MR 18-1 門ノ内)	宮跡	鎌倉時代	ピット・溝・ 土坑	土師器・須恵器・ 瓦器・瓦	鎌倉時代の溝に煮炊具等が投棄されてい る状況を確認した。



図 版







図版一
調査地全景



1 調査地全景（西から）



2 調査地全景（北東から）



図版一 平成 20 年度確認調査、重機掘削、精査作業、第 1 遺構面検出遺構（二）



1 平成 20 年度確認調査地点（北から）



3 重機掘削状況（南東から）



2 平成 20 年度確認調査北壁（再掘削）



4 第 1 遺構面精査作業（西から）



5 東地区・西地区第 1 遺構面完掘状況全景（西から）



図版三 第1遺構面検出遺構(一)



1 東地区・西地区第1遺構面完掘状況全景（東から）



2 南地区第1遺構面完掘状況全景（北から）



図版四
第1遺構面検出遺構
(三)



1 南地区南端第1遺構面完掘状況全景（南から）



2 P 01・02・03 半裁状況（北から）



4 P 07 半裁状況（北東から）



3 P 04 半裁状況（北から）



5 SD 01（東から）



図版五
第1遺構面検出遺構（四）



1 SD 02 遺物出土状況（北から）



2 SD 02 遺物出土状況（西から）



図版六

第1遺構面検出遺構
(五)



1 SD 02 遺物出土状況（北西から）



2 SD 02 遺物出土状況西側（北から）



図版七 第1遺構面積出遺構（六）



1 SD 02 遺物出土状況東側（北から）



2 SD 02（西から）



図版八 第2遺構面検出遺構（一）



1 東地区・西地区第2遺構面完掘状況（西から）



2 東地区・西地区第2遺構面完掘状況（東から）



図版九 第2遺構面積出遺構（二）



1 南地区第2遺構面完掘状況（北から）



2 西地区第2遺構面完掘状況（西から）



図版一〇 第2遺構面検出遺構 (三)



1 東地区第2遺構面完掘状況（西から）



2 南地区南端第2遺構面完掘状況（東から）



図版
一一
第2
遺構
面検出
遺構
(四)



1 P 37 半裁状況（北から）



5 P 51 完掘状況（北から）



2 P 40 半裁状況（北から）



6 P 52 半裁状況（北から）



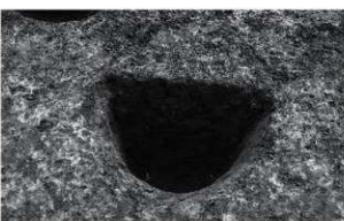
3 P 49 遺物出土状況（北から）



7 P 53 半裁状況（北東から）



4 P 50 遺物出土状況（西から）



8 P 55 半裁状況（北から）



図版一二
第2遺構面検出遺構
(五)



1 P 56 半裁状況（北から）



4 SD 20 アゼ（南東から）



2 P 57・SD 20 半裁状況（南東から）



5 P 59 完掘状況（北東から）



6 P 61 半裁状況（北から）



3 P 57 半裁状況（南東から）



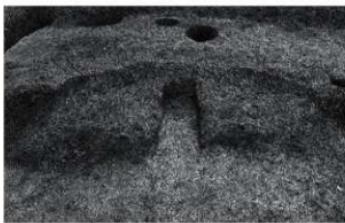
7 P 62 半裁状況（北から）



図版一三
第2遺構面検出遺構
(六)、下層確認



1 P 67 半裁状況（北から）



5 SK 27（北から）



2 SD 21（東から）



6 SK 27 アゼ（東から）



3 SD 22（北から）



7 SD 02 西側下層確認（東から）



4 SK 26 半裁状況（北から）



8 東地区下層確認（東から）



圖版一四
出土遺物
(一)



13



14



图版一五
出土漆器物(1)





圖版一六
出土遺物
(三)





島本町文化財調査報告書 第47集

発行 島本町教育委員会

〒618-8570 大阪府三島郡島本町桜井二丁目1番1号

TEL 075-961-5151

発行日 令和5年3月31日

印 刷 三星商事印刷株式会社

〒602-8358 京都市上京区七本松通下長者町下ル三番町273番

TEL 075-467-5151

